
トランシルバニアン = ラブストーリー

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

トランシルバニアン＝ラブストーリー

【Nコード】

N1589D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ルーマニアトランシルバニアに住む双子の姉妹。二人は同じ人を同時に好きになってしまったけれど。ドラキュラ公のお膝元でも恋愛はあります。

第一章

トランシルバニアン＝ラブストーリー

ルーマニアトランシルバニア地方。今だにあの公爵で有名なこは彼を観光のネタにして生きている。かつては狂気の暴君として恐れられた彼は今は子孫達をその狂気で潤しているのだから実に面白い話である。過去のそれが架空だったならばもっとよかったのだが。串刺し人形いるかい？」

「公爵様の八つ裂きの版画はどうだい？」

「おいおい」

観光客達はそのとんでもない商品を前にして唾然としている。

「とんでもないの売ってるな」

「お客さん、そりゃ甘いね」

「そうそう」

だがそれでは甘いというのが現地の観光業者の言葉だった。まだまだ凄い商品があるのだと誇らしげな顔がそれを告げていたのであった。

「日本人が教えてくれたんだがね」

「日本人が!？」

「ああ、そうさ」

彼等は怪訝な顔を浮かべる客達に告げる。

「日本の漫画家に教えてもらったこれさ」

「さあ買った買った」

彼等が出したそれを見てみると。何とドラキュラ公爵の異常なまでに美化したイラストであった。

あの薄気味の悪い感じの髭の男ではない。陰のある美形でありそれだけ見ると何処の誰だかわかったものではない。皆それを見て唾然とした顔になっていた。

「何だそりゃ」

「誰なんだあんた一体」

客の一人がイラストの人物を見て問い掛ける。

「何処の誰なんだよ、一体」

「教えてくれよ」

「だから公爵様だつて」

「見ればわかるじゃないか」

彼等は口々にその言葉を返す。

「公爵様だよ」

「他に誰がいるんだい？」

そもそもここはドラキュラ公の土地だから観光客が来るのである。狂気の独裁者がいたからこそ。その彼以外の誰がいるのかと問いたくもなるのだった。

「いや、それは」

「なあ」

それは客達もわかっている。それでも言いたくなるのだ。

「買つかい？」

ここぞとばかりに彼等に問う。

「どうするんだい？」

「買つか。とりあえず」

「そうだな。面白いし」

見事な作戦勝ちだった。こうした異色なものを見せられるとついつい手が出てしまう。それが何処の国の人間でも同じことなのだ。

「一枚な」

「二枚じゃなくて」

「一枚でいいさ」

「何でしたらおまけもありますよ」

すかさず勧める。そうした商売の上手さが見事であった。

「ささ、どうぞどうぞ」

「ちえっ、仕方がないな」

客もそれに乗ってしまふ。ここはルーマニアの勝利に終わった。

「わかったよ。じゃあおまけも」

「毎度あり」

こうして明るく楽しく儲けている風景があちこちで見られる。あのドラキュラ公の悪名で売っているわりには随分と明るく食べていると言える。

そうした明るい中に二人の姉妹がいた。見れば双子である。

「ドラキュラケーキ如何ですか？」

「ドラキュラ公が大好きだった血のジュースですよ」

二人は喫茶店の前でトランシルバニアの民族衣装を着て客寄せをしていた。それにしても随分不気味な名前のメニューがある。

白い髪に透き通るような肌をしていて目は青い。湖の青である。その青と髪、肌の白が幽玄な印象を与えてくれる。二人共髪を長く伸ばしておりそれが実によく似合っている。それを見てみると何故か彼女達まで吸血鬼のように見えるのはおそらくここがトランシルバニアだからであろう。ここがトランシルバニアではなくアイルランドか何処かであれば妖精に見える。そうした雰囲気の二人であった。

「ドラキュラ公の好物!？」

「そうですね」

いぶかしむ客ににこりと笑って二人同時に答える。見ればその表情も顔立ちもそっくりである。僅かに違ふとわかるのは一人の顎の右に、もう一人の左にそれぞれ黒子があるということである。それ以外では鏡に映るのと全く同じ感じであった。もっとも黒子の位置から実際にそれをやっても鏡合わせの二人にしか思えはしないのであるが。

「如何ですか」

「美味しいですよ」

「いや、美味しいって言われても」

客はまだかなり引いていた。

「血なんだよね」

「そうです」

一人がにこりと笑って述べる。

「それが何か」

「いや、血を飲むっていうのも」

完全に真に受けている。どうもかなり単純な人間らしい。

「困るな。っていうか美味しいの？」

「ここには美味しいものしかないですよ」

「そうですよ」

二人は揃って言うてきた。

「ですからどうぞ」

「ドラキュラ公の生き血もありますし」

「生き血……」

それを聞いてさらに引く客であった。

「よく警察が来ないな」

「まあまあ」

「興味がおありでしたら」

見事なタイミングで店の扉を指し示してみせる。片方が右手、もう片方が左手で。それを見ているとやはり鏡そのものに見える。

「どうぞ中へ」

「損はさせませんよ」

「うん、それじゃあ」

何だかんだで店の中に入る客であった。

「行くよ。それでいいんだよね」

「はい、どうぞ」

「ようこそ公爵様の屋敷へ」

「何か怖いな」

公爵の屋敷と言われるとついついそう思ってしまうのだった。

「何かされそうで」

「それも中に入ってからの」

「お楽しみです」

「わかったよ」

姉妹に言われてまた中に進む。

「それじゃあね」

「はい」

「お一人様来られました」

店の中に入って注文すると。ケーキは単なる赤い苺のケーキであり、ジュースはトマトジュースであった。だが味は抜群によかった。生き血はワインだった。これもかなりのものだった。

第二章

この店の看板は料理とこの二人であつた。この姉妹は双子である。店の娘でいつも二人一緒である。その幻想的な可愛らしさで客達を見事に引き寄せていたのであつた。

「イレアナとナディアは自慢の娘さ」

二人の父でもある恰幅のいい店のマスターがいつも言う。

「どうだい。俺に似ずに可愛いだろっ」

「まあそうだね」

「それだけは凄いや」

地元の仲間達はよくこう彼に言葉を返す。

「お袋さんに似ているな」

「そうだよな」

マスターはいつも笑顔でその言葉に返す。

「髪は白くて肌が奇麗で」

「本当にこの世のものに思えないさ」

「しかも双子ときた」

「ここも大きかった。」

「二人並んでいると本当に」

「この世にあるとは思えないよな」

「そうだろそうだろ」

赤ワインを飲みながら笑顔で頷くマスターであつた。仕事が終わつた後は飲み屋で一杯、というのはこのトランシルバニアでも同じことである。

「だから店の看板なんだよ」

「羨ましいなあ」

「俺もあんな娘が欲しいよ」

「娘が貰えるのは運さ」

マスターはその運を確かめながら述べた。

「運があると可愛い娘がやって来る」

「じゃああなたはとびきりの幸運だな」

「羨ましいっていうかな」

「ははは、羨ましいか」

しかもその言葉に機嫌をかなりよくさせる。

「それは結構なことだよ」

「じゃあさ、マスターよ」

マスターというのが皆からの仇名にまでなっている。

「ちよつとは幸運分けてくれよ」

「せめてワイン一杯分でもな」

「だからそれも偶然なんだよ」

実際に運というものは偶然そのものである。ある時急に向こうからやって来るものである。これが幸運だけならいいのだが不運もそう。望むものが来るのもまた偶然なのである。

「それはわかるよな」

「わかりたいものか」

「まあ俺達も偶然ここに生まれたいな」

この時代のトランシルバニアに。これもまた偶然なのは事実である。

「それを考えると」

「本当に世の中ってのはわからないもんだよ」

「あの時代のここには生まれたくはないな」

「ああ、それはな」

これには皆頷く。ドラキュラ公はあまりにも残虐な人間だったからだ。貴族や外敵だけを血祭りにあげていたのではないのだ。盗人を一族郎党鬪り殺しにしたこともあるし社会的弱者を屋敷の中に閉じ込めて焼き殺したこともある。これについてはそういう時代であり当時ではよくあったことであるがそれでもドラキュラ公の残忍さは特筆すべきものだったのだ。人をじつくりと時間をかけて残虐に殺すことを楽しんでいたのは事実なのだ。

「じゃあ俺達も運がいいな」
「そうだな」

マスター以外の者達も自分達が幸運だと思つうようになってきていた。

「今ここにいることが」

「それに満足しておくかな」

そんなことを話していた。実際に彼等は幸せであった。特に双子の父親であるマスターはそうであった。しかし当の双子達はこの時思わぬ悩みを抱いていた。

それも同時にだ。二人はそれで困つた顔になっていた。

「何だよ」

「何でなのよ」

二人の部屋は店の二階にある。家と店が一緒になっているのだ。

褐色の質素な部屋である。だがその中を自分達で作つたぬいぐるみで飾られている。それで飾られた部屋の中でどうにも困つた顔をして顔を見合わせて椅子の上で座つていたのであった。

「困つたつていうか」

まずはイレアナが言う。

「どうしたものよ」

「どうしたもこうしたもないじゃない」

ナディアが相手に言い返す。一応はイレアナが姉になっている。

「私だつて困つてるのに」

「それは私もよ」

二人は同じ声で言い合う。姿を見ずに話を聞くと独り言を言っているようにしか見えない。

「まさかこんなことになるなんて」

「そうよねえ」

イレアナはあらためて困つた顔になる。首を捻つて溜息をつく。

「あんたもそうよね」

「当たり前よ」

ナディアは姉に答える。

「そうじゃなきゃこんな困った顔になっていないでしょ」

「そうよね。わかってるつもりだけれど」

「わかっていたらどうするかよ」

ナディアは言う。

「そうでしょ。それが肝心」

「けれどさ、ナディア」

イレアナはあらためてナディアに言うのだった。

「正直どっちも退くつもりはないわよね」

「悪いけれど」

ナディアの返事の声はすっかりしたものであった。それまでの煮え切らない顔とは違って変わった。

「あんたもでしょ、それは」

「ええ、そうよ」

イレアナもまた強い声で答えてきた。

「だから困っているのよ」

「私も。同じ人だったなんて」

「何でこうなるのよ」

二人はまた困った顔と声になって言い合う。はあ、と溜息をつく動作もそのタイミングも全く同じであった。やはり鏡合わせにしか見えはしない。

「予想していなかったし」

「困ったことねえ」

「けれどさ」

イレアナはナディアに言葉を返す。

第三章

「二人同時は駄目だし」

「そうよ。二人で同じ彼氏は無理よ」

ナディアも言う。それがわかっていているからこそ二人は困って悩んでいるのだ。実は二人は同じ男の人を好きになってしまったのである。だから困っているのだ。

「それはわかっていているわよね」

「勿論よ」

イレアナの口が波線のようになって表情も少しいじけたものになる。

「わかっているからってのは言っているじゃない」

「そうよね。これもさっきから言っているけれど」

ナディアも言うのだった。

「私も同じだし」

「何か勝負で決める？」

ナディアは相方にこう提案してきた。

「このままじゃどうしようもないし」

「勝負って何よ」

イレアナはすぐに問い返してきた。

「何かいいのがあるの？」

「そう言われると」

首を傾げるだけであった。

「特にないのよね、これが」

「結局そうなの。何だ」

「じゃああんた何かあるの？」

今度はナディアが問い返す番であった。

「いい解決案。どっちにしる何とかしないと駄目だし」

「ないわねえ」

実はイレアナにもそれはないのであった。

「どうしようかしら」

「かけつことかなら簡単に話が進むのに」

「かけっこねえ」

だがイレアナはその言葉にふと気付いた。

「それいいかも」

「じゃあ走る？競争で」

「ああ、そうじゃなくてね」

そうナディアに言い返す。

「別の方法思いついたんだけれど」

「別の！？」

「そう、別の」

まだあれこれと悩んでいる顔であるがそれでも述べるのであった。

「早い者勝ちで行きましょう」

「早い者勝ち」

ナディアはその言葉に目を少しパチクリとさせた。何となく何が言いたいのかわかった。

「あれ？つまり先に告白してはいと言ってもらった方が」

「そういうこと。それでどうかしら」

またイレアナは言う。

「悪い考えじゃないと思うけれど」

「そうね」

考えてみればそうだ。少なくともこれだと後腐れもないしさっぱりしていると思った。

「じゃあそれでね」

「ええ。じゃあそれで行くわよ」

とりあえずどうするかが決まってイレアナはにこりと笑うのであった。

「いいわね」

「ええ、いいわ」

ナディアもやつとにこりと笑う。こうして二人は何をするのかを決めたのであった。

まず二人はラブレターを書いた。そうして相手のある場所に呼ぶのであった。

そこは学校の校舎の裏であった。二人はそこに行く途中の場所でまた二人で話をするのであった。

「いいわね」

「ええ」

二人でまた打ち合わせになっていた。

「先にはいと言われた方が」

「そういうことでね」

実に念入りであった。とにかく真剣なのは事実だ。そうして正々堂々としていた。二人は少なくともこれで恨みっこなしと思っていたのである。

校舎裏に着くと。まずはイレアナが姿を消した。

「今はあなたの番だったわね」

「ええ、そうだったわね」

ナディアは姉の言葉に頷いた。

「じゃあやらせてもらおうわ」

「明日は私だし」

そういう約束だった。イレアナとナディアはそういうところまで打ち合わせをしているのである。

「そういうことでね」

「わかったわ」

こうしてナディアが一人立つ。やがて向こうから誰かがやって来た。

「ねえ」

それを見てイレアナが声をかけてきた。

「どうしたの？」

「こんなこと言えた義理じゃないけれど」

イレアナは真剣な顔で妹に言うのだった。

「頑張つてね」

そう妹に告げた。

「いいわね」

「ええ。あんたもね」

ここは姉妹、しかも双子だった。こんな状況でもお互いを気遣うことを忘れてはいない。愛情は決して忘れてはいないのであった。

第四章

やがて相手が向こうから来た。背が高く明るい感じの青年だ。実はナディア達と同じ学年の生徒なのだ。ついこの前転校してきたばかりである。

その転校生を二人一緒に好きになったのである。だからこそ二人はこんなに戸惑っていたのである。だがそれも終わりだと。二人は少なくともこの時までには思っていた。

相手が目の前まで来た。ナディアは心の中で十字を切った。そうして彼女から話を切り出すのであった。

「来てくれたのね」

「この学校にもこんな場所があったんだ」

「ええ」

彼の言葉にこくりと頷く。

「そうなの。意外と皆知らないけれど」

「所謂校舎裏だよ」

「そうね」

その通りだ。幾ら何でもこれは否定できなう。

「それで。何の用なのかな」

青年は何でもないと口にした様子でナディアに尋ねてきた。

「呼ばれたからやって来たけれど」

「それはね」

ちらりとイリアナの方を見る。見れば必死の顔でナディアを見ている。彼女を応援してくれているのはそれを見れば明らかであった。

（頑張りなさいよ）

（ええ）

目で言葉を交あわせる。そうして彼女から目を離してまた青年に顔を向けるのであった。

「あのね。ええと」

言葉を慎重に選ぶ。俯いているのが自分でもわかる。

「名前。聞いてなかったわよね」

「ニカエルっていうんだ」

「ニカエル君ね」

「うん。ニカエル＝ガラツ」

あらためて自分の名前を名乗ってきた。

「宜しくね」

「わかったわ。それじゃあガラツ君」

「ニカエルでいいよ」

青年はにこりと笑ってナディアに言ってきた。

「気楽にね」

「そうね。それじゃあ」

まだ何かと戸惑っているのが自分でもわかる。それでも言うのだった。

「ニカエル君」

「うん」

一旦やり取りが仕切りなおされてからまた話が為される。

「あのね、ここに来てもらった理由はね」

「何かな」

「実は。どうしても言いたいことがあってなのよ」

「どうしても」

「ええ。その前に聞きたいけれど」

何か話をする順番が滅茶苦茶になっている気もするがそれでも言うのだった。言わないと話が進まないのが自分でもわかっているからだ。

「彼女とか。いるのかしら」

「今フリーだよ」

ニカエルはにこりと笑って答えてきた。

「転校したばかりだしね」

「そう。よかった」

それを聞いてほっとしたのはナディアだけではなかった。イレアナも同じである。見れば彼女は彼女で木の陰から二人のやり取りを見守っていた。今話を聞いて胸を撫で下ろした顔になっていた。

「それじゃあね。いいかしら」

「うん。よくわからないけれど」

静かにナディアの言葉を聞いていた。それも彼女にとっては有り難かった。

「いいよ」

「あかね」

ナディアはすぐに出なくなりそんな言葉を必死に出す。彼女も必死だった。

「それだったら。彼女がいなかったら」

「うん」

「私じゃ駄目かしら」

そう言ってきたのだった。

「私で。どうかしら」

「ナディアさんだったよね」

「えっ!？」

不意に名前を呼ばれて。思わず顔を上げてしまった。

「どうして名前を？」

「知っていたよ。だって綺麗だったかな」

「そうだったの。知っていたの」

「ナディアさんだったらいいよ」

ニカエルのこの言葉で天国と地獄がはっきりと別れた。ナディアは晴れやかな顔になりイレアナはどん底に落ちてしまった。まさに天国と地獄であった。

「僕はね」

「えっ!？」

この言葉はナディアにとってもイレアナにとっても思わない言葉であった。

「僕はつて!？」

「だから。僕はいいんだよ」

にこりと笑ってナディアに告げる。

「ナディアさんなら。それで」

「それで？」

「ミハエルはイレアナさんが好きなんだ」

不意にそんなことを言うのであった。

「ミハエルつて」

「あれっ、知らないの？」

今度はニカエルが不思議な顔をする番だった。今のナディアの言葉に目を丸くさせる。

「僕の従弟だけれど。一緒に転校してきた」

「一緒に!？」

実は二人はそれは知らなかったのだ。あつという間にニカエルに夢中になってしまったのとその従兄弟同士があまりにも似ていたからだ。とてもそれには気付かなかったのだ。そうした理由があるにしろ二人の注意不足と言えばそうになってしまう。

「そうだよ。ミハエルはね」

「ミハエル君は」

「イレアナさんが好きなんだ」

「嘘……」

木の陰でそれを聞いたイレアナは思わず言葉を出してしまった。またしても思いも寄らない話だった。イレアナは何とか言葉を消すのに必死になっていた。

第五章

「僕はナディアさんでね。だからこの言葉有り難く受け取らせてもらうよ」

「有り難う」

まずは一つの話がハッピーエンドになった。しかしそれで終わりではなかったのであった。

「それでね」

「ええ」

ニカエルが言う言葉を聞く。それはナディアだけでなくイレアナも同じであった。

「明日。この時間にミハエルが来るから」

「明日ね」

「イレアナさんに伝えておいて」

どうやらそのイレアナが隠れていることには気付いていないようである。実際に彼女がいる場所を見ているのではなくナディアを見ている。

「明日ここについて。御願いな」

「ええ、わかったわ」

答えながらちらりとそのイレアナがいる方を目だけ動かして見る。見ればイレアナは驚きのあまり呆然とした顔になってしまっていた。

「それじゃあそれで」

「うん。じゃあさ、ナディアさん」

そのにこりとした笑みでナディアに声をかけるのであった。

「これから宜しくね」

「うん」

ナディアもにこりと笑って言葉を返す。ニカエルはそれに礼を返した後で先にそこを去った。ナディアは一人になると木の陰の方に顔を向けて言った。

「もういいわよ」

「ええ」

それに応えてイレアナが姿を現わす。啞然とした顔のまま妹のところに来た。そうして最初に言う言葉は。

「まさかとは思ったけれど」

「そうね」

ナディアも姉の言葉に頷く。

「向こうも同じだったなんて」

「従兄弟同士だったけれどね」

「ええ。明日なのね」

「今度は逆ね」

ナディアはこう言って笑うのだった。

「イレアナがね」

「そうね。全然逆になるわ」

「よかつたつて言うべきかしら」

ナディアは今度はこう述べた。

「この場合は」

「そう言っつていいんじゃないかしら」

イレアナは少し首を傾げさせて言う。見れば彼女も穏やかな笑みを浮かべていた。

「少なくともどちらかしか付き合えないよりは」

「そうよね。それよりはずっと」

「それじゃあナディア」

イレアナはあらためてナディアに声をかけてきた。

「何？」

「明日は逆で御願いますわ」

にこりと笑って妹に告げてきた。

「私が出て」

「私が木の陰にね」

「そういうこと。それでね」

「ええ、わかつたわ」

ナディアもにこりと笑ってイレアナのその言葉に頷いた。

「それでいいわ」

「有り難う。じゃあ」

そうして次の日。全く同じ流れでイレアナはミハエルという若者に告白された。そうして彼女はそれを受けた。これもナディアと同じ流れであった。

二人はその従兄弟達と付き合うことになった。このことは忽ちのうちに辺りの噂となった。

「これはまた」

「何ていうかねえ」

人々は連れ立って歩く二組のカップルを見て言うのだった。どちらがどちらか全く見分けのつかないその二組を見ながら。

「鏡だね、本当に」

「全くだ」

「ねえ」

皆のそうした話は彼女達の耳にも入る。イレアナは楽しそうに笑いながらナディアにそのことを言うのだった。ナディアはニカエルの左手にしがみついている。イレアナはミハエルの右手だ。二人は丁度隣同士になっている。

「皆私達のこと噂してるわよ」

「そうね」

それはナディアもわかっている。わかっけていて楽しんでいるのだ。

「そんなに噂にしなくてもいいのに」

「それは無理よ」

イレアナは笑ってナディアに告げた。

「幾ら何でもね」

「どうしてなの？」

「だって。何もかもが一緒に見えるのに」

今の自分達の姿について言うのだった。見れば今の二人も彼氏達

もその姿もまるで鏡でお互いを見ているかのように同じに見える。これで注目されない筈がない。

「これで見るなっていうのもね」

「あら、それは違うんじゃないの？」

けれどナディアはイレアナと全く同じ笑みで言葉を返す。

「何故なの？」

「だって。ここはトランシルバニアを」

自分達のいる場所について言う。

「鏡に映ったみたいだといいいじゃない」

「ああ、そういうことね」

イレアナは妹が何を言いたいのかすぐに察した。それで頷く。

「鏡に映るからこそね」

「そういうこと。鏡に映らなかつたら大変よ」

吸血鬼は鏡に映らない。古来から言われていることである。そうした意味で全く鏡合わせに見える二人も彼氏達もいいのだった。トランシルバニアならではの言葉だった。

「でしょ？だから」

「わかつたわ。じゃあ今のままでね」

「いいのよ。それに」

「それに？」

「どっちかが悲しい思いをしなくてよかつたわ」

告白するかどうか困っていた時の話をするのだった。

「そうなつたら」

「そうだね」

「それは僕達も思うよ」

ニカエルとミハエルもそれについて言うのだった。

「若しそうだったら」

「後味が悪いしね」

「そうよね」

イレアナは二人の言葉に頷いた。

「やっぱり」

「後で気まずいことになっていたわ」

「僕達がここに引っ越してきたのは家の商売の為だったんだ」

「家の！？」

「うん」

ニカエルがナディアの言葉に頷く。四人はお互い同士が誰なのかはつきりわかっていた。それは好きだからなのだが他の者には容易にはわからないことである。

「今までブカレストで観光品売っていたけれどね。今一つだったんで」

「そうだったの」

「それでここに来たんだ」

今度はミハエルがイレアナに言う。

「そうしたら今のところ売り上げが全然違うんだ」

「ドラキュラ公の思し召しね」

イレアナはそれを聞いてこう述べた。トランシルバニアではまさにそうした意味でも偉大な英雄だ。子孫を食べさせているのだから

「それって」

「そうよね」

ナディアも明るい笑顔で姉の言葉に頷く。

「それで私達も幸せになれたんだし」

「ええ、そうね」

「じゃあさ」

ニカエルが二人に言う。

「これからも宜しくね」

「僕も」

ミカエルも。二人はその言葉を同じ笑みで受けた。

「勿論よ」

「これからもね」

その笑顔は妖精の笑顔だった。トランシルバニアの妖精の。魅力

トランシルバニアン＝ラブストーリー

的な笑顔であった。その笑顔は少なくとも吸血鬼のものではなかったが間違いなくトランシルバニアの笑顔であった。

トランシルバニアン＝ラブストーリー 完

2007・10・19

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1589d/>

トランシルバニアン＝ラブストーリー

2009年3月24日09時22分発行